
トリックオアトリート

潤

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

トリックオアトリート

【Nコード】

N62200

【作者名】

潤

【あらすじ】

たまたま見かけた女子に
トリックオアトリートと

小北 秦護が声をかけた。

10月15日にね。

そして10月31日。

だいぶ遅い台風の中

声をかけた女子が

小北の家にやってきた。

俺は小北 秦護。

うむ。

10月と言えば

ハロウィーンだ。

かぼちゃ…。

食うのは嫌いだ。

いや違う。

ハロウィーンと言えば

お菓子だろ。

なんとなくだ。

たまたま学校で

見かけた女子に

「トリックオアトリート」

と試してみた。

なんとまーそいつは

クラスメイトで北口 憂といった。

「え…。

小北。

気が早いよ？

ハロウィーンは31日だよ

今日はまだ15日だよ」

「え、そうなの？

なーんだ俺は10月ずっとのことかと思ってた」

「アハハ。

まーその気持ちもわかるわぁ」

「やる？」

「だって10月入ったら町中ハロウィン
一色やん」

「そーそ」

「ま、気が向いたら
なんかあげるかもね」

「あ、いや。」

「いいよ、なんか悪いし」

その日の下校時。

うーん。

ホントこんなに

ハロウィン、ハロウィン言ったら

今月いっぱいまでハロウィンみたいじゃん。

だってたいいのハロウィンセール期間が

10月31日までだもん。

その最終日がハロウィンだったとは。

そしてハロウィン当日。

なぜか日本は遅めの台風がきていた。

大雨も降っている。

そして今日は土曜日である。

学校は休みである。

ピンポン。

俺の家のチャイムが鳴った。

「はい。」

「今でまーす」

カチャ。

「小北？」

「おう」

「って北口か」

なんとそこにいたのは

北口 憂だった。

バタ。

なんか玄関先で倒れられた。

…。

こういうときは救急車か？

いやでも台風のととき救急車動いてくれっかな？

「あーもう」

考えてる時間は少なかった。

とりあえず雨でずぶ濡れの

北口を家に運んで…。

よかったあ。

家には俺しかいなかった。

って家族よ。

台風きてんのにどこ行ってんだか。

父は仕事、母はきつと

近所のパチンコに行ってるだろう。

あ、話がそれた。

で、とりあえず床に寝かせるのは

いかなものだろう。

うん、何かおかしい。

仕方がない。

俺のベットに寝かせるか。

って別にやらしい意味ではないぞ。

ハアハア。

北口がしんどそうに呼吸した。

「お、気付いたか？

北口」

「と……っ……と」
とっど？

何がいいたいんだ。
というよりも

北口は何がしたいかったんだ？

この大雨の中わざわざ俺ん家まで来て。

っいかどーやって俺の家の場所知ったんだ？

疑問はかさなる一方だが。

高熱出してんだ。

熱さまシートを替えねば。

「トリックオアトリートか」

俺が小さく呟いた。

「小北……」

「なんだよ？」

「……はい」

「なんだ、これ？」

かぼちゃのクッキー。

と北口が答えた。

「まさか、お前。」

ほんとにこれを渡すために

わざわざきたんか？」

「……そうよ。」

小北の看病のおかげで

少し楽になったわ……」

「全然大丈夫そうにはみえんがな」

「……ありがと、帰るわ」

「駅どこだ？」

「……言ってもわかんないから言わない。

じゃあね」

カチャ。

玄関に俺が先回りして
鍵をした。

「北口、お前が心配だ。
送ってく。」

それで納得か？」

「…納得しない」

「そんなからだでここから駅までいけるかどうかも
心配なのに…」

俺がまだ説教くらわすべきか
悩んでるうちに

北口は玄関の鍵を開け、外へ出た。
「…かこいつ。」

傘すら持つてきてねえ。

「ホント何考えてんだか…」

「…アンタのこと」

「へ？」

「…なんでもない」

「じゃ、駅までついていくぞ」

「…ありがと」

ふらふらで駅までついた。

切符を買い改札を通る。

そんな仕草を見ていたら

なんかすごく心配なってきた。

「北口。」

切符はどこまでだ？」

「…」

うつすらと聞き取れた地名は
ここから結構遠い場所だった。
電車に揺られてついた場所。
そして北口の家の前まできた。

「ふう。

ここがお前ん家か。

北口」

「…小北」

「なんだよ？」

「…ありがと」

北口が俺の首に腕を回してきた。

そのまま首を伸ばしてキスされた。

「…好きだよ」

カチャ。

ボタン。

そうして北口は俺の視界から消えた。

まーキスされて嬉しかった。

正直言つてあの日。

トリックオアトリートといったのは

ただ一人でいるのをみかけて

これは話しかけるチャンスと思って

ついた嘘だ。

それ以降というか

それ以前からずっと北口

お前が好きだったんだ。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連「横書き」という考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n6220o/>

トリックオアトリート

2010年10月31日19時30分発行